

頭陀袋

(28) 平成二十六年十一月号

発行 中山かんのん

恩林寺



中山中学下、電話三四一一四五

*信心の綱（譬喩經より）

ある国王が、大工の棟梁に命じて、とても高く立派な石柱を建てさせた。それがあまりにも見事な石柱だったので王は、棟梁が他の国に出かけて行つて同じようなものを建てられると困ると思い、棟梁が石柱頂上にのもぼつている間に、足場を全部取り払わせてしまった。すると棟梁は夜になつて自分の着ていた服をすべて細かく引き裂いて下にやつと届くほど身を案じた親族が集まつていて垂らされた布の縄に太い綱を結びつけてやると、棟梁はそれを吊り上げ、石柱に縛り付けて、綱を握つてスルスルと地上に降りることことができた。さてこれは何のたとえ話であろうか。高い石柱はひとが生き死にして迷いを重ねるこの世である。足場が取り払われたのは過去の諸仏がすでに滅を唱えて現世におられないことを意味する。しかし、後の信徒である棟梁が衣服を裂いて仏の残された法の縄とし、下に垂らすと仏法を後の世に伝つけて、塔に繋ぐえる僧が親族として集まり、信心の綱をようこそさせ、これによつて生き死にの迷いを完全に離れるようにした。といふ、たとえ話である。

*袈裟の功德（地蔵十輪經より）
昔、ある国に死罪を宣告された男がいた。この国では罪人を悪鬼の住むところに連れて行きその体を食わせるという習わしだった。罪人はそれを聞いていたので、何とか助からうと思ひ髪をおろし袈裟を求めて、その切れ端を得ることができ、それを首にかけた。

罪人は悪鬼の住む場所に連れて行かれ夜になつた。すると鬼たちは男を食べようとゾロゾロと出てきた、彼はその様子を見て震え上がつたしかし、その時、鬼の母はこの男が坊さんのように髪をおろし赤い袈裟の切れ端を首にかけているのを見て彼の周りを右回りに合掌しながら歩くのだった。鬼の子供は腹が減つていたので「早くこの人間を食べたいよう」と母に言うと「この方は仏様の袈裟を身に着けているので食べてはいけません。食べると再び無間地獄に落ちますよ。」といつて止めた。そしてすべての鬼たちを説得して食べさせないようにしたので命拾いをした。そして、夜はしらじら明けてきた。役人たちは彼が鬼に食われなかつたのをみて大変驚き、王にこのことを告げた。すると、王はこれより仏の弟子や授戒したものは鬼でも食べないのでからこれより後、死罪をやめることにした。この話から人がなくなると摺り袈裟を首のかける信仰が生まれたといわれている

*お寺に行こう。和尚さんと、ともだちになろう。

を、キヤツチフレーズに今年は、いろいろな行事を計画しました。先日は門前の有志のご発案でお寺でカ今ラオケ大会を催しましたところたくさんの方に来ました。また、寺の隣の公園で開催される来年もぜひ、との声がかかつております。